Information

6月20日は「世界難民の日」

もともと6月20日は「アフリカ難民の日」でしたが、2000年12月4日、国連総会は、「世界難民の日」とすることを決議しました。この日を「難民の日」として、難民の保護に対する世界的な関心を高めようというものです。

今年のテーマは「難民の帰還～安全で尊厳のある生活を再建できる故郷と呼べる地」をテーマとして、新たな故郷を求め自主帰還、現地定住、もしくは第三国定住していく、難民の挑戦と希望に目を向けます。

UNHCR駐日地域事務所では、多くの人が世界の難民に思いを寄せる機会にしようと、難民の日を挟んだ6月18日（金）～7月14日（水）まで、UNハウス（国連大学ビル）UNギャラリーにて「世界難民の日」写真展を開催いたします。

ほとんどの難民は、たとえどこにいようと、一途な勇気と希望を持っています。「世界難民の日」写真展を通し、きわめて困難な状況下にある難民の勇気と忍耐に敬意を表し、「私たちに何ができるのか」を考えてみませんか。

タナカ（タナカの木を砕いて粉にし、水と混ぜたもの）を顔に塗ったミャンマー難民の少女。　撮影：沼田早苗

「世界難民の日」写真展

開催期間：2004年6月18日(金)～7月14日(水)　土・日を除く
開催時間：10:00～17:30（18:00閉館）
場　　所：UNハウス（国連大学ビル）1、2階　渋谷区神宮前5-53-70
（地下鉄「表参道」駅B2出口から徒歩5分、JR「渋谷」駅東口から徒歩8分）

展示内容
- タイのミャンマー難民（写真家 沼田早苗氏 撮影）
- アジアやアフリカの難民、避難民、帰還民など
- UNHCRと協力関係にあるNGO（非政府組織）提供の写真と活動紹介
  ―ジェン（JEN）、シャンティ国際ボランティア会（SVA）、難民を助ける会（AAR）、反差別国際運動（IMADR）、ブリッジ エーシア ジャパン（BAJ）

入場料：無料
主　催：UNHCR駐日地域事務所
後　援：外務省
協　力：沼田早苗氏、オリンパス株式会社、日本国連HCR協会

ANGOLA

アンゴラでは、2002年春、30年以上におよぶ内戦が終わった。しかし、内戦で故郷を追われた人の数は400万人を超え、うち45万人は近隣諸国に避難した難民で、国の再建と避難民の社会復帰が現在大きな課題となっている。ここで紹介するのは帰還してきた少女エスペランザ・カビバ（15歳）の物語。欧州人道援助局（ECHO）やUNHCR、パートナー機関の援助を受けて、なんとか未来を築くチャンスを手にしようとしている。

エスペランザは、ザンビアとの国境に近いアンゴラの町カゾンボに帰ってきた元難民の少女。以前は母親や弟、妹とコンゴ民主共和国にいた。ザンビアに避難していたこともある。難民キャンプでは支給される物資で暮らしていたが、今は母親が始めた小さな商売を手伝って、一生懸命働かねばならない。母親は野菜を育て、地元の市場に卸そうとしているが、頼りはエスペランザの若さとエネルギーだ。

「野菜を育てるにも、刈り入れ用のハサミも買うにもお金がかかります。けれども帰還民の私たちにはそれがありません。だから僅（わず）かなトウモロコシの配給があると、その一部を売ってお金に換えるんです」とエスペランザはため息をつく。「お金がなければ、大した事はできないのです」

アンゴラは世界で最も地雷に悩まされている国だ。推定700万個の地雷は、長い間、市民の生活を脅かしてきた。耕作に適した安全な土地もごく僅かで、彼女の家族はその危険を無視して、マニオカ（タピオカの原料）とジャガイモを栽培している。だが収穫までには時間がかかる。それまでの間エスペランザは1時間ほど歩いたところにある農家でキャンディーを仕入れ、市場で売っている。彼女は、今カゾンボに帰還してきた十代の若者グループに参加している。そこでポルトガル語（アンゴラの公用語だが、難民となり他国で成長した子どもたちには理解できない）の習得や新しい生活への適応の方法など、抱えている問題を話し合う。「何年生？」と聞かれたエスペランザは、憂鬱そうに答えた。「わかりません。学校に行ったことがないんです」。

しかし、エスペランザは、明るい未来を夢見ている。新しく生まれ変わったアンゴラでの家族みんなの未来。「とにかくこの国が発展して欲しい。私たちが勉強して、アンゴラ発展の原動力になりたいです」